

35 貝原益軒著『大和本草』記載の

ミイラの薬効について

○江頭 啓介・原 敬二郎

中国本草の最重要典籍の一つとされる『本草綱目』は、明代（二五九三）に李時珍によって著わされ約一九〇〇種が収載されている。内容は『神農本草経』以降の伝統本草を踏まえながら李時珍自身の説が大いに取り入れられており、我国では『国訳本草綱目』として翻訳されている。

『大和本草』は貝原益軒七九歳に著せられた大作である。益軒先生は、この『本草綱目』を讀破され中国の薬草で日本で実用される動植物を九一五種、日本固有のもの三五八種、中国以外の海外産二九種をこの中に収載されている。

ミイラは木乃伊として卷一六に記載され、打撲骨折に外用及び内服として用いられ、その他労咳にも卓効があ

るが、元來人間であつたものを人間が薬用であるにせよ用いる事は仁礼の道に反し君子の忍び難き事であると書かれている。この記載は昨今の臓器移植論議を考える上においても興味深い。

ミイラの薬効としては、前述の項目以外に次の如く記されている。

氣血両虚の人（氣力弱り貧血もある人）にミイラを粉にして蜂蜜を混じて梧桐子大（梧桐の実の大きさ）の丸とし、一日一〜二回お湯で服用する。

産後に出血により虚脱状態になつた人。

氣疲れが亢じて胸痛し、また痰がからんで出にくい人。

吃逆（しゃっくり）で胸が痛む人。

歯痛や虫歯のため歯に穴があいている人はミイラの粉に蜂蜜を加えて塗る。

頭痛や眩暈にミイラを粉にしてお湯にて服用する。

妊婦が転倒して失神したときミイラを火にて焼き、その香りを嗅がせるとよい。

高熱の場合、粉にして水で服用させる。

毒虫に刺された傷に粉末にして、油を混じて湿布する。

このように実に多彩な薬効が記され、万能薬の觀を呈している。実際には益軒自身は用いていないものの、現代の靈芝やローヤルゼリーのような健康食品と同じで狂信的な愛用者があり、日本では恐らく産しない為に貴重な金銀を投じて輸入され使われていたものと推定される。

どのようにしてミイラが作られたのかという製法に關しては、実際に海外に渡航してエジプト等の産地(?)で確認する事など思いもよらぬ時代なので想像上の仮説が多くあつたようであるが、益軒は五説ありと記している。その一説は、砂漠を往来する人々は鋼鉄や石製の車に乗っているが、大風が吹き車が倒されてそのまま人も砂漠に埋つて次第にミイラ化したのであろうと書かれている。後の時代の人が砂漠を熊手を使ってミイラを探すという珍説も紹介しているが、流星にこの説は否定している。いづれにしても江戸中期から後期にかけてミイラが相当量輸入され、医療に供されていた事は事実であろう。中国医学という大きな幹から分かれた日本の伝統医学は、薬用量やその実証主義的な考え方などで本家中国と

の相違が特に近世以降次第にはつきりして来た。ミイラの実際の医療現場での使われ方についても、中国では殆んど使われていないのに対し、日本では一部でさかんに用いられていたという事実がある。彼我の医療の差異を考える上でも興味深いことである。

(1) 江頭会さくら病院)

(2) 恵光会原病院)